

小新聞投書家・中坂まときの階層認識

市井の“思想家”の「下等社会」観

石 堂 彰 彦

1. はじめに

中坂まとき（1845～1883、本名は中川真節^{まとき}）は、主に1880（明治13）年前後の“小新聞”において、投書家として名を馳せた人物のひとりである。本稿の目的は、現代においては無名だが、当時においてはその名を知らぬ者はなかったとさえいえる中坂の階層認識を探ることにある。その際、小新聞全般の階層認識の動向と中坂の階層認識の関連についても、可能なかぎり視野に入れて検討する。それは、「世間話」レベルでのオピニオン・リーダー⁽¹⁾ともいわれる常連投書者が、民衆に大きな影響力をもった小新聞の論調にどのような変化をもたらし、あるいはもたらさなかったのかという問題意識にもとづいている。

中坂に関しては、小新聞などの民衆向けメディアに関する研究がその職業について触れている程度であり⁽²⁾、まとまった研究はない。小新聞の投書者では、中坂と同時期に常連投書者であった南新二に関する論考があるが⁽³⁾、文学的関心からのものであり、本稿のように階層認識を取り上げたものではない。この時期の階層認識に関する研究は、拙稿⁽⁴⁾をのぞけば、たとえば福沢諭吉や徳富蘇峰など、ほぼすべてが当時の著名な知識人について論じたものである。しかし小新聞の投書者は、知識人と民衆とのあいだに立つ、いわば思想の仲介役であった。そうした投書者の一人である中坂の階層認識を明らかにすることは、知識人の階層認識が民衆に浸透していく過程を考えるうえで、ひとつの手がかりともなる。

むろん中坂以外にも、当時小新聞の投書家として著名であった人物は存在するが、本稿で中坂を取り上げる理由はいくつかある。第一に、第2章

で詳しくみるように、その投書数の多さである。1 件の投書だけをみれば、その文章の長さは限られており、そこから投書者の思想を探ることは容易ではない。しかし投書数が十分にあれば、1 件の投書に表出された断片的な思惟をつなぎあわせることで、投書者の思想の全体像を再構成することも可能となろう。土屋礼子によれば、1880 年までの期間で、いわゆる三大小新聞（『読売新聞』『東京絵入新聞』『仮名読新聞』）への投書掲載数をもっとも多いのは、400 件近い高島屋塘雨であり、わずかな差で中坂がそれに次いでいる。それ以下の投書者の投書掲載数は、高島屋、中坂の半数に満たない⁽⁵⁾。なお筆者の調査の限りでは、中坂に著作を残した形跡はない。

第二に、当時の小新聞の記者・投書者は、戯作者や商人がその多くを占めていたが⁽⁶⁾、中坂は私塾の塾主という、ある意味で異色の職業だったことである。中坂と同時代に小新聞の投書者であった野崎左文は、当時の投書者の多くは「軟文学」に属したが、「まとき氏の如き漢学出は別」⁽⁷⁾であったと回顧している。また中坂の経歴についてはほとんど知られておらず、それを明らかにすることで、中坂の階層認識を知る一助ともなると思われる。

そして第三に、さきにふれたように、筆者はかつて小新聞全般にみられる階層認識に関する調査を行なったが、その過程で中坂の投書にも接していた。その際中坂の階層認識が、他の記事や投書と若干異なるものがあるように感じられ、いずれ中坂の投書についてまとめたかたちで調査してみたいと考えていたことである。

それでは以下の第 2 章で、まず中坂の経歴や小新聞・雑誌への投書動向を確認する。そして第 3 章において、中坂が投書活動を開始する以前に政府に提出した建白の内容を検討し、そのうえで投書にみられる中坂の階層認識とその背景について論じていくこととしたい。

2. 中坂の経歴と投書動向・同時代評

2-1 経歴

中坂は 1845（弘化 2）年、膳所藩士神谷氏の次男として生まれた（生年

は没時の年齢から推定) 初名を信緒といい、まもなく中川氏の嗣子となり、真節と称したという⁽⁸⁾。その後明治に入るまでの消息は明らかでないが、1872(明治5)年5月に「宮内省使部」から芝大神宮の「祠掌」となったとされており⁽⁹⁾、1872年以前は宮内省に出仕していたことがわかる⁽¹⁰⁾。

中坂は1877(明治10)年3月まで芝大神宮に務め、その後根津神社の「祠官」⁽¹¹⁾となったらしい。そしてその間、自らの私塾で教育にも携わっていた。1875(明治8)年の『日本帝国文部省年報』(以下『年報』と略記)の「私立小学校表」に、その私塾の情報が記載されている。それによれば、私塾の名称は「思誠堂」で、設立が1873(明治6)年、所在地は飯田町となっており、すくなくともこのころには中坂まときという筆名のもととなった飯田町中坂に住んでいたと思われる。当時の教員は1名で、これは「学校主」であった中坂本人と推測されるが、生徒数は男子31名、女子17名であった。翌年の『年報』では、名称が「中川学校」と変更されており、生徒数は男子25名、女子26名である。さらに1877年の『年報』になると、教員に女性1名が加わり、生徒数は男子33名、女子24名と微増している。なお中坂は投書の筆名で、「巖の舎の主」といった肩書も用いているが⁽¹²⁾、「巖の舎」とは中川学校の通称と思われる。

「思誠堂」の設立は、『年報』では1873年となっているが、『日本教育史資料』によれば、幕末にさかのぼる。同書の巻23「私塾寺子屋表」の「寺子屋」の欄に、「飯田町中坂」の「思誠堂」についての記載があり、その設立は1857(安政4)年、教科は「礼読画」、教員は男女2名ずつ、生徒数も男子140名、女子83名となっており、明治年間と比べかなり隆盛していたようだ。また「塾主」は、「中川左京」という士族であった。遅くとも1873年には塾主が中坂に代わっているため、この中川左京が中坂の義父か、あるいはそれに近い親族であったのだろう⁽¹³⁾。中坂も中川左京と同じく士族の出身であったが、のちの投書で「府下の平民」という肩書を用いており⁽¹⁴⁾、なんらかの理由で平民となったと思われる。

そして1875年末より、中坂は神社と中川学校での職をこなすかわら、投書活動を開始している。中坂は「明治14年11月5日創刊の『東京ふりかな新聞』には第1号から補助として署名」⁽¹⁵⁾したとされるが、中坂は当時「傍訓新聞社より^{しばへ}屢聘するも固持して応ぜず」⁽¹⁶⁾といわれており、他の多くの投書家とは異なり、新聞記者となることを目的として投書活動を

行なっていた⁽¹⁷⁾わけではなかったと考えられる。だが順調な投書活動を送っていたかにみえた中坂は、突然の病により、1883（明治16）年12月、38歳でその早すぎる死を迎えることとなる。

このような中坂の経歴においてとくに注目すべきことは、副島種臣との関係である。中坂は副島とは師弟関係にあった可能性が高く、そのことが中坂の投書にも影響を及ぼしていたと思われる。この点については第3章で詳しく検討する。

2-2 新聞・雑誌への投書動向と同時代評

中坂の投書先の新聞・雑誌を、各年の投書掲載数とともに示したのが表1である。表のうち、『絵入』から『朝日』まではふりがなつきの小新聞であり、『風雅』から『芳譚』は文芸系統の雑誌である（略称については表の注を参照）。できるだけ多くの紙誌を調査することに努めたが、東京と大阪以外で発行された新聞等については、時間の制約から調査を断念せざるを得なかった。また原則として、各紙誌の投書欄に掲載されたものを調査対象とした。ただし、『スッポンチ』には「笑福一家言」欄、『芳譚』には「阿々漫筆」欄または「櫻蔭漫録」欄という中坂専用の執筆欄が設けられており、これらは正確には投書ではないが、表に掲げている。以下ではこれらも含めて投書と呼ぶこととする。

なお、同時期に発行されていた『花の都女新聞』『真新聞』『童蒙新聞』『東京さきがけ』『鈴木田新聞』『此花新聞』『小学雑誌（日就社）』の各紙誌には、中坂の投書はなかった。また管見の限りではあるが、中坂が知識層向けの“大新聞”に投稿したことはなかったようだ。

中坂の投書が最初に掲載されたのは、1875年12月27日付けの『絵入』である。私塾塾主であった中坂の投書活動が『絵入』から始まったことは、『絵入』が「仮名書で絵がはいつていますから新聞杯を見る気のない少な小児迄が」（『絵入』1876.1.31.）読んだといわれたことと関係があるかもしれない。中坂はこれ以降精力的に『絵入』への投書を行っており、とくに1877年の1年間は、ほぼ3号に1回の割合で投書が掲載されている。そして徐々に他の紙誌へも投書するようになり、晩年にいたるまでほぼ毎年100件以上の投書が掲載された。他の投書家の投書数については、前述の土屋の調査による東京の小新聞三紙以外に関しては詳らかではないが、中坂の

表1 中坂の投書掲載紙誌と各年の投書掲載数

| 紙誌名 | 1875年 | 1876年 | 1877年 | 1878年 | 1879年 | 1880年 | 1881年 | 1882年 | 1883年 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 絵入 | 1 | 68 | 88 | 48 | 17 | 12 | 32 | 22 | 17 | 305 |
| 読売 | 0 | 4 | 10 | 4 | 29 | 32 | 33 | 30 | 20 | 162 |
| 仮名読 | 0 | 7 | 24 | 26 | 14 | 8 | - | - | - | 79 |
| いろは | - | - | - | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 1 | 6 |
| 有喜世 | - | - | - | 3 | 18 | 7 | 7 | 0 | 0 | 35 |
| 真砂 | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 |
| 朝日 | - | - | - | - | 26 | 30 | 2 | 0 | 0 | 58 |
| 風雅 | - | 0 | 0 | 12 | 5 | 1 | 0 | 0 | - | 18 |
| 魯文 | - | - | 2 | 19 | 0 | - | - | - | - | 21 |
| スッポンチ | - | - | - | 0 | 7 | 4 | - | - | - | 11 |
| 芳譚 | - | - | - | 3 | 66 | 70 | 64 | 59 | 40 | 302 |
| 合計 | 1 | 79 | 124 | 116 | 183 | 168 | 138 | 111 | 78 | 998 |

(注) 略記した紙誌名の正式名称および変遷は以下のとおり。本文の略称もこれに準ずる。

『絵入』 = 『平坂名絵入新聞』(1875年) 『東京平仮名絵入新聞』(1875年) 『東京絵入新聞』(1876年)

『読売』 = 『読売新聞』

『仮名読』 = 『仮名読新聞』(1875年) 『かなよみ』(1877年)

『いろは』 = 『安都満新聞』(1878年) 『いろは新聞』(1879年)

『有喜世』 = 『有喜世新聞』(1878年) 『開花新聞』(1883年)

『真砂』 = 『東京毎夕新聞』(1877年) 『真砂新聞』(1878年)

『朝日』 = 『朝日新聞』

『風雅』 = 『風雅新聞』(1876年) 『滑稽風雅新聞』(1877年) 『風雅新誌』(1880年)

『魯文』 = 『魯文珍報』

『スッポンチ』 = 『月とスッポンチ』

『芳譚』 = 『芳譚雑誌』

(注) 表中の「-」は、当該紙誌がその年に発行されていないか、発行されていても紙面を確認できなかったことを示す。

投書数は、当時の数ある投書家のなかでも際立っていたといえるのではないだろうか。

実際に投書家としての中坂の名は、すでに1870年代末には不動のものと

なっていた。1879（明治12）年に『スッポンチ』が掲載した「名譽七福神東京諸新聞社」は、当時の著名な新聞人や新聞関係者を一覧表にしたものだが、その「投書家」7名のなかに中坂の名をみることができし、投書家の名文集めた『同見集』（1881年）にも、中坂の投書が掲載されている。また全国の「文苑有名家」を網羅したという『明治文雅都鄙人名録』（1881年）には、「文・書」に秀でた者のひとりとして中坂が挙げられている。さらに『新聞投書家列伝 初編』（1881年）では、小松原英太郎や小幡篤次郎などの知識人に混ざって中坂が紹介されており、中坂の名声がいかに遍く行き渡っていたかを知ることができよう。

中坂の死に際しては、投書家たちの追悼文が、中坂にゆかりのあった紙誌に数多く掲載されたが、その死後も中坂の名は人びとの記憶に残っていた。野崎左文はその回顧録において中坂にたびたび触れており⁽¹⁸⁾、昭和にいたっても「明治の投書家」として中坂の名が挙げられている⁽¹⁹⁾。また内田魯庵も中坂に言及しており、以下にその部分を引用しておこう。

其頃の読売新聞の投書欄は当時の唯一の文芸場であつて、前島和橋、南新二、琴通舎康榮、高島藍泉といふやうな当時の名流が盛んに寄書して紙面を賑はしてゐた。就中、最も軽い諷諭と円転自在の名文で聞えたのが中坂まどき^{ママ}であつて、「まどき」の名は当時の読売新聞の読者の間に喧伝された。此の「まどき」といふは偕行社の真裏^{ママ}に当るの世継稻荷の奥の代用小学校の持主で本名を中川真節と云つた。「まどき」は最う三十年も前に死んで了つたが、当時の読売新聞投書欄の愛読者は今でも「まどき」の名を記憶してゐるだらう⁽²⁰⁾

「最も軽い諷諭と円転自在の名文」という部分は、魯庵にとどまらず、同時代から後世にいたるまでの中坂に対する評価を、凝縮して表現しているように思われる。中坂は、「文苑有名家」であつたし、また「軟派」⁽²¹⁾と考えられていた。社会的な発言があつたとしても、それは「婦女童蒙ヲ諷諭スルノ文」⁽²²⁾と評されるにとどまっていた。あくまでも中坂は、文芸方面における有名人だったのである。

しかし中坂はたんなる名文家だったわけではない。次章でみていくように、とりわけその階層認識には、同時代において急進的とさえいえるものがあり、その背景に確固たる政治的信念を認めることができるのである。

3. 中坂の階層認識

3-1 中坂の建白書 投書以前の階層認識

中坂の建白書は、1874（明治7）年10月に「芝大神宮祠掌 中川真節」という署名とともに左院に提出されている⁽²³⁾。中坂は建白書に表題を記していないが、左院によって、「生民之品級ヲ設ケ職業上之勤惰ヲ表スル之議」という、建白の内容を簡潔に示した表題が付されている。

この建白書の冒頭で、中坂は建白提出の趣旨を明らかにしている。要点を記せば、「君民」の「富岳ノ安」を維持するためには、「富国強兵」が必要である。そして「陸海軍備」を拡大するための費用は「民力」に依存するのであるから、「民力」が「強大」であれば「軍備」も「盛大」となる、ということである。そこで「民力」の「強大」をいかに達成するかが、建白の主題として論じられることとなる。

「産業ヲ勉励セシムルノ告諭」はあるが、それにもかかわらず、「勉磨尽力セサル者」が存在する。そのためさらなる「勤業ノ方法」が必要であり、それは「生民ノ品級」を定めることにある、と中坂は述べる。そして次のような「方法大略」を示している。

仮令ハ一ヶ月十円金ノ商業ヲ為ス者アラン之レヲ等外一級トシ一ヶ月七十円金ノ商業ヲ為スモノアラン之ヲ八級トシ〔凡官等ノ月給ニ比例シテ其大体ヲ見ルノミ〕一ヶ月八百円金ノ商業ヲ為ス者之ヲ一級トス〔一級ヨリ以下七級ニ至ル級毎ニ上下ヲラクモ可ナリトス〕然シテ未タ尽サ、ルアリ故ニ又級外ニ勲級ヲ設ク

つまり収入の多寡によって、人びとを等級にわけるというものである。さらにこれ以外にも、「蓄財」の金額にもとづいて勲一級から勲十六級までの「勲級」を付与し、金額を毎年確認してその増減に応じて「勤惰ヲ賞罰」することや、「門々戸々等級ヲ揭示セシメ一目ニシテ其勤惰ヲ瞭然タラシム」といった提案も行っている。

こうした方法によって、人びとがその「勤惰」に応じて「栄恥」を知ることとなり、それが「民心奮発ノ一助」となるであろうと中坂は述べ、最後に次のように結んでいる。

前条卑説モシ実地上ニ行ハセラル、ニ於テ八千歳ノ後ト雖一目ニシテ天下ノ富ト国家ノ隆替ヲ知ルニ足り且大ニ民心ヲ鼓舞シテ各自勉力セ

シムルノ大益トナリ貧民モ振起シテ豪商トナルノ氣象ヲミントス然レ
ハ独リー民ノ幸福トナルノミナラズ天下後世ノ幸福トナルナリ天下後
世ノ幸福トナル時ハ自ラ富国ノ基礎トナル必セリ希クハ不文陋愚ヲ捨
玉ハス御熟察アランコトヲ恐懼々々建白

このように「富国」実現のために、人びとの「奮発」心を喚起する方法を示すことが、建白の主眼であった。だがその内容はかなり極端であり、左院は「言フベクシテ行フヘカラス」方法であり、「紛擾碎雜ノ方ヲ設ケテ民業ヲ勤奨スルハ政府ノ主意ニ非ス」として中坂の建白を退けている。

この建白において最も注目すべき点は、中坂が繰り返し述べているように、民衆の「奮発」心を喚起することが急務であるという主張である。中坂はそのための方法としてやや性急な手段を主張したが、その背景にあるのは、「栄恥」は人びとの「勤情」の正当な評価にもとづいて与えられるべき、という認識であったように思われる。そして正当な評価の裏づけがあってはじめて、「貧民モ振起シテ豪商トナルノ氣象ヲミントス」といったことが可能となる、中坂はそのように考えていたのではないか。それは逆にみれば、人びとの「勤情」が正当に評価されておらず、そのため「勉磨尽力セサル者」が存在するという現状認識でもあったはずである。

実際に中坂は、建白後の小新聞等への投書において、「勉磨尽力セサル者」であれば、それが華士族であるか平民であるかを問わず、ことごとく批判の対象としていた。むろん平民だけでなく華士族に対しても、その怠惰を批判することは、当時の小新聞では当たり前のことであった。しかし中坂は、以下で検討するように、人力車夫や職人などの「下等社会」に対する小新聞の論調が変化したのちにあっても、人びとを正当に評価しようとする姿勢を貫き通したのである。

3-2 投書における階層認識

3-2-1 「下等社会」に対する理解と啓蒙

前節で触れたように、1870年代の小新聞では、その行為や言動が旧弊・悪弊とみなされた者は、身分にかかわらず批判の対象とされた。しかしそれは一方的な非難や否定ではなく、改心を促す“説論”であった⁽²⁴⁾。中坂の投書も説論を中心としており、『絵入』に最初に掲載された投書は、私

塾教員らしく子供に実学の重要性を説くものであった。

その後次第に、中坂の投書内容は多岐にわたるようになる。「シビリセーション」の趣意を説き（『絵入』1876.2.28.）、裏店の「八熊先生」に奮起を促し（『絵入』1876.4.14.）、あるいは強欲な商人を論し（『絵入』1876.8.25.）、華族を批判する（『読売』1877.6.5.）。

こうした投書は、中坂に限らず一般にみられるものだったが、すくなくとも階層認識に関していえば、中坂のスタンスには他の投書者と異なるものがあつた。小新聞全般の傾向としては、1877（明治10）年の半ばを境として、平民の中下層である裏店に対して「下等社会」ということばが用いられるようになり、それは次第に蔑視の意味を帯びようになっていった。つまり裏店に対する説論が減少し、かわって裏店の職人や人力車夫をさげすむような投書が増えていったのである⁽²⁵⁾。

そして中坂も同じ時期から、「下等社会」ということばを使うようになる。しかし「下等社会」が蔑視の意味合いを帯びていくなかであつて、中坂は「下等社会」に対する説論を続け、一方的な非難・否定の対象とすることはなかつた。たとえば「下等社会」は「喧嘩早の我利々々蒙者」か「野蛮未開の屁茶無苦連^{へちやむくれん}」であり、「東京人の面汚し^しとまで述べながらも、かれらの行為に対する批判を直接かれらに「為て聞せた」（『絵入』1877.12.22.）という中坂の姿勢は、民衆を文明開化へと進める役割を担った教導職に通じるものがある。あるいは裏店の「九尺二間の棟割長屋」における生活環境の低劣さについて、それをやむをえないことと理解を示すだけでなく、さらに「一番身上をグツと仕出したら小生の言を用ひて必ず普請は涼しく造るやうに心掛たまへ」（『読売』1881.8.23.）と説論を加えることもあつた。

むろん中坂も、以下の投書に明確に示されているように、「下等社会」が否定されるべき旧弊を抱え込んでいるという認識を抱いていたが、それでも「下等社会」に対する期待を捨てることはなかつた。

旧弊に拘泥し不開化極まるもの多きを見れば下等社会より又甚しきものはなしといふべきが如し然れども朝日新聞の出るあるや必ずしも嚴霜の消滅するが如く漸次開化の真域に進んで終には旧弊不開化の痕跡を裏店小店の下等社会にも遺さゞるに至らん事更に疑ひを容れず（『朝日』1879.2.18.）

中坂のこうした説論は、裏店の「下等社会」であっても立身出世が可能であるという考えにも支えられていた。たとえば「車夫の我利々々蒙者たるは勿論の事」だが、その子供であっても「これを学校の教師に依頼して知識を広めてもらへば終には精神の発達する時ありて……ドンナ出世するかも知れぬわけ」(『朝日』1879.10.8.)という投書や、「賤しき人もよき教育を受けしものは世に用ひられ亦随ッて其家の栄えざるはなし」(『読売』1879.10.16.)といった投書では、教育によって現在の境遇から抜け出すことができるという認識が示されている。それは以下のように、裏店に対するより直接的な呼びかけという形をとることもあった。

裏店より店蔵附の表店へ出でたるが如きあらば一足飛の最も上等といふべし……諸君精出して此飛越を心掛なさッては如何で在ませう(『読売』1879.10.1.)

中坂の投書においてさらに特徴的な点は、それが「下等社会」へのたんなる説論にとどまらなかったことである。中坂は、「下等社会」でも「真心」は「五所持に相違ない」(『絵入』1877.8.1.)と述べ、あるいは人力車夫は「不良の望を懐く」が、同時に「智謀才略」にたけた「明治年代の……小姦雄」(『芳譚』1883.3.10.)であると評する。これらの投書からは、「下等社会」には批判される点だけでなく、評価されてしかるべき面もあるという主張を読み取ることができよう。中坂のこうしたスタンスは、次の投書により明瞭に現れている。

勇氣といふものは独りはんくわい樊張飛の如き豪傑猛士のみ専有する次第にあらず下等の隊長たる我利々々惣次も我羅ッ八も皆多少の勇氣なきものはあらざるなり去れども兎角この下等連中が用ゆる処の勇氣は用ゆべき地に用ゐずして用ゐなければ成らぬ地に用ゐざるゆえ勇氣も勇氣とするに足らずとするに至る豈惜しむべき事ならずや……日本帝国の人民は極の下等まで勇氣なきものあらざれば此上は憤んで濫用せぬやうにお気をつけられたが宜いぞや(『読売』1879.9.2.)

「下等社会」に対する説論のなかにも、「下等社会」の評価すべき点を見出し、それを引き出そうとする中坂の投書は、この当時にあつて際立っていた。しかし「下等社会」に対する中坂の視線は、以上にとどまるものではなかった。次項でみるように、中坂はより急進的ともいえる言論を展開していたのである。

3-2-2 一般的な「下等社会」認識に対する批判

前項でみた中坂の投書は、あくまでも形式上は「下等社会」に対する説諭を主としていた。それは見方によっては、「下等社会」以外の者、すなわち「中等社会」や「上等社会」に対して、その「下等社会」への視線のありかたを間接的に問うものであったとすることも可能であろう。しかし中坂は、「中等社会」や「上等社会」を、直接の批判対象とすることもあったのである。

たとえば中坂は、「裏店社会」にも「中等以上」「上等社会」にも等しくみるべきところがあり、「下等社会の山の神」は「礼を上等社会の御新造に習」い、「御新造も亦賃仕事を山の神に稽古すべ」きであり、「其長を互に心掛」(『絵入』1877.8.9.)よ、と述べる。あるいは「錦衣玉食の貴公子少しく我々の裏店社会なる猫なで声を聞て世間の窮も又甚だしきを覚る処あれ」(『読売』1881.12.29.)と論ず。これらの投書は、「中等社会」「上等社会」の「下等社会」に対する視線のありようを、より直接に問題視するものであった。中坂のこうした姿勢は、次のように「中等社会」「上等社会」自体への批判となって現れることもあった。

些シク文字ニ通ジ少カニ理儀ヲ曉ルモノハ自ラ上等社会ニ位スルト云
ハ又計リノ見識ヲ鼻ノ先キヘブラ付セテ居ルモノノ随分官途ニモ又世間
ニモ少ナカラザルナリ……然レドモ其実ハ……上等ト称スルモ未ダ必
ラズ上等ナラズシテ均シク上等々々ト称スル中に甲乙丙丁戊己庚辛…
…等ノ段落ナシトスベカラズ到底又下等ヲ中等ト偽ハリ中等ヲ上等ト
虚飾シタルニ過ザルナリ其真ニ上等ニ位シ無類飛切タルモノハ屈指ス
ルモ其レ或ヒハナカランカ(『芳譚』1879.10.6.)

そして中坂の投書においてもっとも重要な点は、「下等社会」を裏店と同一視するという、一般に流布していた認識そのものを批判したことにあ
る。その主張を最も明瞭に展開した投書は、その名も「下等論」と題され
たものである。やや長文だが重要な投書であるので、全文を引用する。

下等論

我利々々蒙者と屁茶無苦なるもの一般に呼で下等社会と云ふ此の一語
偶然きく処にては豪も間然する処なきが如し諸君の思想亦如何と問
はゞ必ずや然なりへと一斉に右手を拳玉ふならんと推察せり去れど
も小生はいまだ其下等社会の我利々々といひ屁茶無苦と呼ものは凡そ

何らの商業をなし凡そ何らの身代を所有して如何なる地位に立ちいかなる行ひをなすものかを判知せざるなり諸君は必ず此の社会たるや多くは車を挽くにあらざれば天秤棒を肩にして足は草鞋を脱ぐの暇なく手は仕事を休むるに間なきものならざれば財産もなく商業も甚だ手薄のものにして襤褸袍古の着物一枚年が年中股栗して居るものなどをさして我利々々とか屁茶的とか下等社会とか名目を付与し玉ふ事明らけし然れどもトツクリ胸に手をあて勘考し去れば此輩のみをさして下等々々と罵るは冤といはざるを得ざるものあるなり

見よやかの財産に富み豪家の聞えあるものにして自分の遊興には猫に狐に肉林酒池巫山戯三味やりながら公衆に対しては慈愛の心少しもなく己れ独り安楽なれば他人の痛苦は三年五年乃至百年でも二百年でも(ホイ其時分は当人がお陀仏だ)こらへて呉るといふが如き強欲無道の輩が目下窮民のますへ窮に陥り旦夕に苦境に迫るをもトント構はず米穀を買しめ以て商法の玄機に達せりと心得るが如き奸悪卑野なるものは天の之れを悪み人の之れを怨むは勿論の事即ち是れ天人に容られざるの罪人にして其心魂は禽獣にも如ずといふべく人倫中の最下等となすも足らざるが如く屁茶無苦といふも我利々々といふも腹のいる限りを知らざるといふ可きものなり

是に於てや前論を回顧すれば世人が一般に下等社会と呼び我利々々蒙者屁茶無苦連の名称を下す者は誤見にして唯身代の乏しきと其形容のやつへしきを見かつ文字なきより皮相したるものにして決して其公衆に關係するほどの大不徳を見出し而して後公評したるものにあらざるなり故に我輩が考る処によれば此の下等の名称は裏店の貧乏社会よりは寧ろ強欲無道の富人なるものを称して可ならんと思考す知らず此の論の為に眉をシカメルものは誰そ(『朝日』1880.1.17.)

まず第一段落において、一般に人びとが「下等社会」というとき、それは人力車夫や棒手振などの貧しい者を指しているが、それは「冤」ではないかと読者に疑問を投げかけている。そして第二段落で「財産」を有する「強欲無道」の者が「米穀」を買い占め、「窮民」をいっそう窮に追いやっているのは、「最下等」以下の行為であると指弾し、最後の段落にいたって、一般に「裏店」を「下等社会」とするのは皮相の見方であり、上述のような「大不徳」をなす「富人」こそが「下等社会」と呼ばれるべきであ

ると結んでいる。「下等社会」の意味を問い返し、「財産」の有無を「下等社会」か否かの基準とする通念を、痛烈に批判したものといえよう。

さらに、この投書と類似した内容の投書は、他にも掲載されていた。たとえば「裏店社会」の人力車夫や「日雇稼の者」であっても、「一家和合して人倫の道に欠たる事をせざる以上」は、「下等社会の我利へ蒙者」とはいえない。しかし「中等」であっても「其一家いつも風波の騒絶間なく動ともすれば隣家の迷惑になる事のみ多からば」、その者こそ「下等社会」というべきではないかとする投書（『有喜世』1879.3.25.）があった。あるいは「下等社会」を定義して、「裏店社会」だけでなく「紳士」や「紳商」も含まれるという投書（『読売』1882.1.17.）もある。これらにはニュアンスが異なる部分も含まれているが、いずれも「中等」以上の社会にも「下等社会」が存在すると主張している点では共通する。

また、さきの「下等論」では、同時代人が賛嘆した「円転自在」の文章はほとんど影を潜めていた。中坂が文を飾らずに、ここまで直截に議論を展開することはきわめて珍しいことである。このことは、同時代において中坂の考えと反する「下等社会」認識が、それだけ一般に広まっているという中坂の危機感を示しているように思われる。それゆえに中坂は、自らの意見をより明瞭に、くりかえし陳述しなければならなかったのであり、おそらくこの点に、中坂の主張の核心があると考えられるのである。

このように、中坂は裏店を「下等社会」とする通念に対して、それを根底から批判する言論活動を行っていた。前項で、「下等社会」について中坂がさまざまな観点から論じた投書のみてきたが、それらは本項で明らかとなったように、そもそも「下等社会」とは何か、という原理的な視点に立ち返ることで生み出されたものだったといえるだろう。そして中坂は晩年にいたるまで、その態度を一貫して取り続けた。こうした中坂の階層認識の背景には、ある部分では教育者としての立場があったとも考えられるが、次節でみるように、それ以外にも重要な要因があったのである。

3-3 階層認識の背景

中坂の階層認識に影響をおよぼした重要な要因とは何か。それはさきにふれたように、中坂と副島種臣（1828-1905）との関係である。副島は、1874年の「民撰議院設立建白書」に板垣退助らとともに署名し、その前後

において外務卿や侍講を務めた人物である。この副島について、中坂が「吾が師副島種臣先生」(『芳譚』1881.1.2.)と述べていることや、両者の年齢差などからみて、その関係は師弟関係かそれに近いものであったとみてよい。二人の関係がいつ形成されたかは不明だが、上記『芳譚』の投書では、副島から「染筆」を受け取り、それを床の間に飾ること「爾来斯二三年矣」と述べていることから、すくなくとも1870年代末には副島を「先生」と呼ぶ関係となっていたと思われる。

そして1882(明治15)年半ばには、東京において副島が結成した「改進黨」という組織の「約書」および「心得」が、中坂の手によって『芳譚』に掲載された(1882.5.6.、5.11.)。中坂はこの改進黨の一員だったのだろう。この年には他にも、副島の演説や、副島の「持論」などが中坂により『芳譚』(1882.8.19.、11.11.)に紹介されており、中坂に対する副島の影響を示している。そこで以下では、中坂の階層認識に関連すると思われる部分について、副島の思想を参照しておきたい⁽²⁶⁾。

まず『芳譚』に掲載された演説では、副島は次のように論じている。

上等とか中等かと云社会らしき人か下等社会には選挙被選挙の権はなしと謂はれたものゝ忽地^{たちまち}に下等社会かなきものとならばおまゝ^{きもの}衣物も家造も如何にして出来ませふ滅多らしき話しにはこさらぬか抑上等とか中等とか云人は金銭こそ多もあるへけれ自ら操作することなきの游民さまよ諸君ありて後の金持さまよそれを顧みずして諸君を輕蔑する戲言は吾代りて謝す(1882.8.19.)

また『日本立憲政党新聞』に掲載された「副嶋種臣君意見」には、次のような件がある。

我々人民に於ても互に相恭敬し親愛して仮りにも下等社会^{上等社会}等の名称ある可らず夫れ人自から内に侮りて後他人之を外に欺くものなり我々は他を下等社会とする者の己れ自から下等の人たるを知るなり(1882.8.23.)

「下等社会」に対する一般の「輕蔑」を「謝し」、あるいは「他を下等社会とする者」自身が「下等の人」であるとする副島の考え方は、まさに前節で検討してきた中坂の階層認識に一致する。また、上に引いた副島の演説では、「下等社会」に「上等」「中等」が依存しているということを副島は論じていたが、中坂にもこれとほぼ同趣旨の次のような投書がある。

若其れ三千五百万の兄弟が残らず揃つて地面地屋敷田畑山林持^{もた}ぬ者なしとせばいかにサア事が下女鉢巻を（ホイ横道）其下女になる者もなく人力を挽く者もなく小作する者もなく日雇に出る者もなく何より好な新聞を配達してくれる者も有まいし今日は御用はいかゞと尋ねに来る酒屋の小僧さんも有まい実^まに薫に油揚をとられた狐のやうにコンまる事になりゆきませう……然れば世に小民だの賤民だの下等社会だのといつてどうやら伶俐らしい人の眼から見下してかゝるは頗る道理の違つてゐるわけだらふと考へられます（『絵入』1883.1.20.）

このように中坂の階層認識は、副島のそれとほぼ同一であるといつてよい。さらに階層認識だけでなく、政治に関する議論などにも両者の共通点を認めることができる。たとえば参政権について、さきの副島の演説文では「下等社会」に「選挙被選挙の権」が与えられないことを問題としていたが、中坂もその演説文のコメントとして「凡そ人たるものは皆選被の両権は必ずしも天然に有する理ある」と述べており、両者とも普通選挙を主張していたことがわかる。

むしろこのような副島と中坂の関係を、たんに副島の思想に中坂が影響されたものとみることにはできない。そう断じるには両者の関係についての史料が不足している。だが両者の影響力を比較すれば、中坂が副島の思想をかなりの程度受容したとみてよいだろう。

しかし他方で、副島の影響があったかどうかは不明だが、すくなくとも中坂の投書を、その根底において支えていた中坂自身の“哲学”を、断片的な投書のなかから垣間見ることができる。

たとえば「小生は又此十把一束といふ辞が大嫌いで（諺に坊主を悪でけさに及ぼす）」（『絵入』1876.11.14.）と述べた投書は、物事の全体を一面からのみ判断することを批判したとも読みうるが、それは「一首の歌」にも「人々の心に感ずるは亦其人毎に異なり」（『朝日』1879.5.24.）といった投書とあわせて考えることで、ひとつの事象を多様な視点から観察し判断することの重要性を、中坂が継続して認識していたと理解することが可能だろう。そしてそれは、「下等社会」を一面的にみるのではなく、多様な視点からみることによって、その評価すべき点を正当に評価するという、中坂の態度へとつながっていると考えることができよう。

あるいは「我分限を忘れて他人の短き所にばかり眼を付たがる」（『絵入』

1876.12.16.) ことを批判した投書は、「人のふり見て我ふりを」(『朝日』1880.11.6.) という俗諺を論じた投書と通底している。それは自らを省みず、「下等社会」の「短き所」のみをみて蔑視する人びとを批判した、前述の投書の基底に流れる考え方だったのではないだろうか。

このように中坂の階層認識には、副島の影響が強く認められると同時に、中坂自身の経験から得られた視点も、すくなく関係していたと思われるのである。この中坂の階層認識においてもっとも重要な点は、裏店を「下等社会」とする通念を批判し、「上等社会」から「下等社会」にいたるまで、予断なく観察して評価したことにある。そしてその姿勢は、「下等社会」にも「選被の両権」があるという、きわめて政治的な主張にまで貫徹されていたのである。

4. おわりに

ここまで階層認識を軸として、中坂の投書を検討してきた。そこから立ち現れたのは、「円転自在の名文」を操る戯文家ではなく、明確な階層認識をもち、それを世に問う市井の“思想家”としての姿であった。中坂の「下等社会」観は、明らかに小新聞全体にみられる階層認識とは異なるものであった。そしてそれは、同時代の大勢とも相容れないものであったようにも思われる。そこに副島の影響があったことは明らかだが、事物の一面だけではなく、その多様な側面を見据えるという中坂の姿勢もまた、「下等社会」をたんに裏店と同一視することなく、逆に「上等社会」「中等社会」に対しても、臆することなく物をいう批判的意識の高さを生み出すことへとつながったと考えられるのである。

ところで小新聞の多くは、制限選挙を認めた立憲改進黨系といわれている²⁷⁾。だがその小新聞が、中坂のように普通選挙を主張する人物を常連投書者として受け入れていたことは、この時期の小新聞投書者の多様性を示唆している。それは同時に、小新聞がどのような意味において改進黨系といえるのか、再検討が必要であることを示しているようにも思われる。

たとえば1882(明治15)年1月、『読売』に「下等社会」に関する中坂の投書が掲載された²⁸⁾。そしてその後、同月の『読売』に、同じく常連

投書者であった華睡庵（高島屋塘雨の別号）と渡辺晴雪の立身出世論が掲載された。そのなかで高島屋は、「大人とて怖るべからず小人とて軽るべからず」（『読売』1882.1.20.）と述べ、渡辺は「上に在ものは常に粗にして下にあるものは常に精なり」（『読売』1882.1.29.）と論じていた。これらは中坂の所論にかなり近いといってよい。だが同時期にこうした投書が相次いで掲載されたことを、たんなる偶然とみることはできない。なぜなら、中坂は高島屋、渡辺と親交があったのである⁽²⁹⁾。

この時期の常連投書者は、新聞社などが主催する親睦会によって交流を深めていた⁽³⁰⁾。しかし中坂らの例にみられるように、かれらは一枚岩ではなく、そのつながりにもおのずから親疎があった。それはおそらく、それぞれの投書者の関心や政治思想の違いなどによって生じていた。そのような違いや共通性によって、常連投書者がグループを形成して投書活動を行っていたとすれば、常連投書者はそれぞれが相互に独立したオピニオンリーダーではなく、いくつかのグループに分かれ、小新聞やそれ以外の民衆向けメディア内で勢力を争っていたとも考えられる。もしそうであるとすれば、中坂と高島屋、渡辺という有力な常連投書者のグループが、投書や他の手段によって、小新聞の政治的スタンスになんらかの影響を与えていた可能性も否定できない。そこには、中坂の投書にみられたように、改進黨の主張に反するものも含まれていたかもしれないのである。

ただしその場合でも、投書者が独自に生み出した政治思想を主張することはなかったと考えられる。中坂が副島の影響を受けていたことは、そのひとつの証左となろう。おそらく政治に関わる言論を展開していた投書者の多くは、特定の政治結社の影響を受け、あるいは独自に政治思想を吸収し、それを投書という形で読者に伝える役割を果たしていたと思われる。

このように中坂の投書は、小新聞をはじめとした民衆向けのメディアが、その内部に多様な思想をもつ投書者を抱えていたことを示唆しているのである。そしてその実態を明らかにすることは、これらメディアの同時代における思想的位置付けや、その後の展開を考えるうえで、重要な意味をもつ課題といえるだろう。

<注>

- (1) 津金澤聰廣(1998)『現代日本メディア史の研究』ミネルヴァ書房 62
- (2) 土屋礼子(2002)『大衆紙の源流』世界思想社、福井純子(1999)「京都滑稽家列伝」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房など。
- (3) 池田一彦(1998)「南新二の投書活動」国文学研究資料館編『明治開化期と文学』臨川書店、同(2001)「南新二・投書の粗描」『成城国文学論集』27
- (4) 拙稿(2010)「1870年代の小新聞における「下等社会」と階層認識」『マス・コミュニケーション研究』76
- (5) 土屋(2002)前掲書 120-121
- (6) 小野秀雄(1922)『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社 109-110、山本武利(1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局 72-73
- (7) 野崎左文(2007)『増補 私の見た明治文壇』第1巻 平凡社 61
- (8) 『いろは新聞』1883.12.25.
- (9) 芝大神宮(1942)『芝大神宮誌』府社芝大神宮 157-159
- (10) ただしこの時期に発行された各種の『官員録』には、中川真節の名は掲載されていない。
- (11) 津田権平(1881)『新聞投書家列伝 初篇』東洲堂 71
- (12) 『絵入』1876.9.25.など。
- (13) なお中川左京という人物については不明だが、山川健次郎監修(2003)『会津戊辰戦史 復刻版』マツノ書店の付録「明治戊辰殉難名簿」に、同名の人物について記載がある。それによると、中川左京は医者で、その息子の泰助が戊辰戦争時に幕府側の純義隊に加わり、1868年4月20日に21歳で戦死したとある。この2人の中川左京が同一人物とすれば、中坂が1883年に没したときの年齢が38歳であり、1868年には23歳前後となるので、戦死した泰助は義弟であった可能性もある。
- (14) 『絵入』1877.7.15.
- (15) 宮武外骨・西田長寿(1985)『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房 168。『東京ふりかな新聞』については、宮武外骨が収集した新聞を所蔵している明治新聞雑誌文庫にも原紙が存在せず、紙名から小新聞と推測される『東京ふりかな新聞』に、中坂が具体的にどのように関わっていたか確認できなかった。
- (16) 『いろは新聞』1883.12.25.
- (17) 土屋(2002)前掲書 122
- (18) 野崎(2007)前掲書 第1、2巻
- (19) 梅本塵山(1935)「明治の投書家」『本道楽』108
- (20) 内田魯庵「おもひ出す人々」白井吉見編(1980)『明治文学回顧録集(1)』筑摩書房 239
- (21) 梅本(1935)前掲論文 14
- (22) 津田(1881)前掲書 71
- (23) 色川大吉・我部政男監修(1988)『明治建白書集成 第4巻』筑摩書房 37-39。以

下、引用は同書による。

- (24) 拙稿(2010)前掲論文 259
- (25) 拙稿(2010)前掲論文 267-269
- (26) 副島の思想を参照するにあたって、齋藤洋子(2010)『副島種臣と明治国家』慧文社が非常に参考となった。
- (27) 西田長寿(1966)『明治時代の新聞と雑誌』至文堂 112-119
- (28) この投書については、第3章第2節でも触れている。
- (29) 1883年2月に『読売』に掲載された「下総八日市小松」という人物の投書において、高島屋が「余は予て中川真節渡辺晴雪の二氏と桃園に盟約せねど共に鼎立の交際有り」(1883.2.1.)と語ったと記されている。高島屋は1882年に没しているが、その後中坂が高島屋の妻から和歌を贈られ(『読売』1883.3.22.)さらに可愛楼(渡辺)晴雪が中坂の追悼文中で高島屋に触れていることなどから(『読売』1883.12.25.)三者がとくに懇意であったことは確実である。
- (30) 野崎(2007)前掲書 第1巻 60-61